

論文

般舟三昧経「行品」

——和訳と訳注——

吹田隆徳

〔抄録〕

前回(第48号)に引き続き支婁迦讖訳『般舟三昧経』(T. 418)の和訳を行う。この経典ならびに「行品」(第二章)を取り上げることに、まず第一にその訳出年代(179年)の早さから、この経典は大乗仏教を知る上で最初期の資料となる。さらに和訳を試みる「行品」はこの経典の原初形態を示すとされている。このような最初期の経典の原形部分を研究することにより、この経典の思想的中心たる般舟三昧のみならず、大乗初期の様相まで垣間見ることができると考えている。本稿では「行品」を研究する前段階として和訳と訳注を作成する。

キーワード：支婁迦讖、初期大乗、浄土教、阿弥陀仏、念仏

はじめに

本稿は吹田2020の続編であり、「行品」(第二章)後半部(T 13, 905a03-906a11)の和訳となる⁽¹⁾。この範囲では般舟三昧の実践に必要な詳細が七つの譬えと共に解説される。また思想的特徴として般若空思想と阿弥陀信仰の共存が見られる。この点に関して、先行研究では般若空思想が本経の基調であり⁽²⁾、後者に肝心の阿弥陀仏は諸仏の一例に過ぎないとみてきた⁽³⁾。近年に末木1989が原初形態を「行品」までと想定して以降は、そこにしか現れない阿弥陀仏こそが本来の見仏対象であった可能性が高く、一例とする見解は見直されつつあるが⁽⁴⁾、般若空思想を基調とする根本的な見解は定説となって残されている。

この定説に問題がないわけではない。例えば〈八千頌〉は「善男子であれ、善女人であれ、信ある者は如来にして阿羅漢なる正等覚者を特徴に従って作意するのだが、実にスプーティよ、特徴がある限り執着がある」*śrāddhaḥ kulaputro vā kuladuhitā vā tathāgatam arhantaṃ samyaksambuddhaṃ nimittato manasikaroti, yāvanti khalu punaḥ subhūte nimittāni tāvantaḥ saṅgāḥ*. (ASP 417, 16f.) と言い、仏を作意するにあたり有相的な態度を否定的にみる。この仏

を作意する (*manasi-Kṛ*) という行為は、本経においては般舟三昧の実践に等しい⁽⁵⁾。そして諸仏を対象とする際には無相的な態度をとるが、しかし阿弥陀仏が対象の場合には有相的な態度をとる⁽⁶⁾。つまり般舟三昧の実践態度としては有相と無相が並立し、思想的な一貫性を欠いた状態になっている。般若空思想を基調とみるのであれば、このような一貫性の欠如をどのように説明するかは一つの問題となってくる。

そこで再び注目すべき見解を挙げておく。それは本経の成立に般若空思想が必ずしも必要ではないとみる色井 1963 の見解である。現存する資料から眺めると、本経は「行品」ですら空思想と不可分に見えるが、この見解が示唆に富んでいるのは、空思想との必然的な関わりを認めず、大乘仏教の中で空思想が発展するにつれて次第に結びつきを強めたとみる点である。この見解はかつて櫻部 1991 が取り上げたように考慮に値する。いずれにせよ、本経の原形論が更新されたことで特に今回の和訳範囲に見る内容を虚心に検討し直す必要が生じていると言えるだろう。

和訳に際しては、前回(吹田 2020)と同様、他の資料(Tib., T. 416, T. 417, T. 419)と比較し、異同などの問題が見られる場合は必要に応じて詳細を注記しておいた。さらに同じ支婁迦讖訳とされる『道行般若経』に同一の訳語が認められる場合、『道行般若経詞典』(Karashima 2010)からの引用を注記した。また底本に関しては、本経の場合、高麗版が原形を留めているという Harrison (1990, 221-249) の指摘を踏まえ、基本的に『高麗大蔵経』の読みに従って翻訳し⁽⁷⁾、他に『宋版磧砂大蔵経』第七卷(No. 69)などを参照した。尚、各ロケーションの先頭に付した英数字は PSS による区分と一致する。

和訳と訳注

(3A: T 13, 905a03-a10) 仏陀はこのように言った。「次のような行法によって三昧はもたらされる。すなわち現在諸仏が悉く目の前に立つという三昧 (i.e. 般舟三昧⁽⁸⁾) を会得することである。〔では〕、どのようにして現在諸仏が悉く目の前に立つという三昧がもたらされるか〔という〕、颯陀和よ、次のようである。戒を完全に保っている比丘、比丘尼、優婆夷、優婆塞は、独りである場所にとどまって、今現に在す西方の阿弥陀仏 (**Amitāyus*⁽⁹⁾) を想う (**cittam ut-Pad*⁽¹⁰⁾)。〔そして〕聞いた内容に従って作意しなければならない (**yathāśrutam manasi-Kṛ*⁽¹¹⁾)。〔つまり〕『ここから千億万の仏国土を過ぎた⁽¹²⁾〔所にある〕その国は須摩提 (**Sukhāvati*⁽¹³⁾) と呼ばれる。〔そこで阿弥陀仏が〕多くの菩薩たちの中央におられて、教えを説いておられる』〔と、このようにして〕いかなる時も常に阿弥陀仏を作意しなければならない』と。

(3B: T 13, 905a10-a17) 仏陀は颯陀和に言った。「例えば、人が眠りに落ちて⁽¹⁴⁾、夢の中であらゆる金や銀や珍しい宝、父母、兄弟、妻子、親族、友人と一緒に楽しみ、喜び、意に逆ら

うことのないの⁽¹⁵⁾を見るようなものである。その者は夢から覚めると、その〔夢での〕ことを人に話す。後に涙を流しながら夢で見たことを思い返す(**anu-Smr*⁽¹⁶⁾)。同じように、颯陀和菩薩よ、もし出家者〔あるいは〕在家者が西方の阿弥陀仏国土を聞いたならば、その方角の仏を作意しなければならない。戒を欠くことなく、ひたすらに作意する(**manasi-Kṛ*⁽¹⁷⁾)こと一昼夜、もしくは七日七夜すれば、七日が過ぎて以降に阿弥陀仏を見る。目覚めている時に見られなくとも夢の中でかの〔阿弥陀仏〕を見る」

(3C: T 13, 905a17-a27)「例えば、人が夢で見るものは昼かもわからず、夜かもわからず、また内にいるのかもわからず、外にいるのかさえわからないようなものである。〔夢の中では〕暗闇の中にいるからといって見えないということもなく、障害物があるからといって見えないということもない。同じように颯陀和よ、菩薩が〔阿弥陀仏を〕想う(**cittam ud-Pad*⁽¹⁸⁾)時には、諸仏国との間に須弥山と呼ばれる大きな山があり、真っ暗な場所(**lokāntarika*⁽¹⁹⁾)があるとしても完全に見通すようになる。目も障られず心が凝げられることもない。その菩薩摩訶薩は天眼をもつことによって見徹すわけでもない。天耳をもつことによって聞き徹すわけでもない。神足をもつことによってその仏国土に到達するのでもない。この〔世界〕で〔の生涯を〕終えて、彼方の仏国土に生まれてやっと見ることができるのでもない。この〔世界〕にいながらにして阿弥陀仏を見て、説かれた教えを聞き、〔その教えを〕すべて把握し理解する。三昧の中で〔教えを〕すべて具足して、人々のためにそれを説くのである」

(3D: T 13, 905a27-b08)「例えば、ある男が墮舎利國⁽²⁰⁾(**Vaiśālī*)に須門(**Sumanā*)という遊女がいることを聞き、〔別な〕ある男が阿凡和梨(**Āmrapālī*)という遊女のことを聞き、〔さらに別な〕ある男は優波洹(**Utpalavarṇā*)という女が遊女となったと聞いたとしよう。その時、〔三人の男〕それぞれは〔それぞれの遊女たちの〕ことを考える。その男たちはいまだかつてその三人の遊女たちを見たことがなかったけれども、その〔遊女たちの〕ことを聞いて姪欲がすぐにはたらいだ。そして夢の中でそれぞれがその遊女のところへと出掛けていった⁽²¹⁾。この時、三人すべては羅闍祇國⁽²²⁾(**Rājagṛha*)におり、時を同じくして〔それぞれの遊女を〕作意した(**manasi-Kṛ*⁽²³⁾)。それぞれが夢のなかでその遊女のところに行き、共に夜を過ごした。かれらが夢から覚めると、それぞれがその〔夢を〕思い返す(**anu-Smr*⁽²⁴⁾)」と。

仏陀は颯陀和に告げた。「私は三人〔の遊女の譬喩〕を〔汝に〕托そう⁽²⁵⁾。汝(颯陀和)はこの〔譬喩での〕事例とともに人の為に教えを説いて、その意味するところを理解させ⁽²⁶⁾、不退転に至らせて、無上なる正等覚を得させなさい。後に〔その者たちが〕覚りを得たならば、善覚という〔仏〕となるだろう」

(3E: T 13, 905b8-b10)「このように颯陀和よ、菩薩はこの世界の国土で阿弥陀仏を聞き、何度も作意する(**manasi-Kṛ*⁽²⁷⁾)。この作意によって阿弥陀仏を見るのである。〔そして、阿弥陀〕仏を見てから問いかけた。『どのような徳目(**dharma*)を具えれば、阿弥陀仏国に生まれることができるのでしょうか』と。

(3F: T 13, 905b10-b19) その時、阿弥陀仏はその菩薩に次のように語った。「私の国に生まれてほしいと思う者は常に私を何度も随念(**anu-Smṛ*)しなさい。常に随念を修して⁽²⁸⁾、中断することがあってはならない。このようにすれば私の国に生まれることができる」と⁽²⁹⁾。

仏陀は言った。「その菩薩は念仏(**buddhānusmṛti*)によって阿弥陀仏国に生まれることを得る。常に次のように念じなければならない。[すなわち] 仏の身体は三十二相を具足し、光明は遮られることなく照らし、端正で他に比べるものがなく、比丘の僧団の中にあつて教を説いて、「壊れないもの」を説く。壊れないものとは何かというと、色受想行識、靈魂、地水火風、世界では天から上の梵天から大梵天に至るまでが壊れないものである。仏を念じることによって空三昧を得る。このようなものが仏随念(**buddhānusmṛti*⁽³⁰⁾)である」と。

(3G: T 13, 905b19-b23) 仏陀は颯陀和菩薩に告げた。「誰が[般舟]三昧を直証(**sākṣāt-Kṛ*⁽³¹⁾)する者なのかというと、我が弟子、摩訶迦葉(**Mahākāśyapa*)、因坻達菩薩(**Indradatta*)、須眞天子(**Susīma*)、そして適時にこの三昧を知る者、この三昧を体得しようと実践する者が直証する者である。何をもち証したとするのかというと、この三昧が空三昧であると知ることを証とする」と⁽³²⁾。

(3H: T 13, 905b23-c03) 仏陀は颯陀和に告げた。「遙か昔に須波日⁽³³⁾と呼ばれる仏がおられた時、ある者が出掛けていくと、広大な湿地に入ってしまう⁽³⁴⁾、食べ物を得ることができずに飢えと渇きで眠ってしまった。すると夢のなかで、いい香りのする甘美な食べ物を得て食べ終えたが、[夢から]覚めるとお腹は満たされていなかった。[そして]自ら『存在するものは皆すべて夢のようなものだ』と考えたのである」。仏陀は言った。「この者は[すべてのものが]空であると考えることによって、無生法忍を得て⁽³⁵⁾、不退転に至ったのである。このように颯陀和よ、菩薩はある方角に現在仏[がおられると]聞いたなら、常にその方角を作意する(**manasi-Kṛ*⁽³⁶⁾)。仏を見たいと願うなら仏を作意しなさい。[見る対象が]存在するとも存在しないとも考えてはならない。私が立っているのを[見て]、空を思うようにしなさい⁽³⁷⁾。[すなわち]、仏が立っている[その姿が]まるで珍しい宝石を琉璃の上で寄せ合わせたようだと思ひなさい⁽³⁸⁾。菩薩はこのようにして十方に無数の仏の清浄な[姿]を見る」

(3I: T 13, 905c03-c09) 「例えば、人が遠くへ出掛けて他の国に到着し、郷里、妻子、親族、財産を思い返す(**anu-Smṛ*⁽³⁹⁾)と、その人が夢のなかで故郷に帰り着いて、妻子、親族に会って喜び、一緒に話すようなものである。夢のなかで見て、そして[夢から]覚めて、友人にそのことを話す。「私は故郷に帰り着いて、我が妻子と親族を見た」と。

仏陀は言った。「菩薩も同じ様にある方角に仏の名前を聞いたならば、常にその方角を作意(**manasi-Kṛ*⁽⁴⁰⁾)して仏を見たいと望みなさい。[すると]菩薩は仏[の姿]がまるで珍しい宝石を琉璃の上に寄せて置いたようであるのをすべて見る」

(3J: T 13, 905c09-c18) 「例えば、比丘が死人の骨を観じて[その面]前に置くようなものである。ある時は青を観じ、ある時は白を観じ、ある時は赤を観じ、ある時は黒を観じる。そ

の骨を持って来た誰かがいるのでもなく、骨が存在しているのでもなく、〔骨が〕どこからかやって来たのでもない。それは心が作った表象に他ならないのである。菩薩はこのように仏の威神力によって三昧の中にとどまって、見ようとするいかなる方角の仏であっても、見ようと望めばすぐに見ることができる。それはなぜかという、毘陀和よ、次のようである。つまり、この三昧は仏力によって成り立っているからである。仏の威力をもって三昧の中にとどまる者には三事がある。〔すなわち〕、仏陀の威神力 (**anubhāva*⁽⁴¹⁾) をもつ事、仏の三昧力をもつ事、〔自らが積んだ〕過去の功德力をもつ事である。この三事があることによって〔菩薩は〕仏を見ることができる」

(3K: T 13, 905c18-c25) 「例えば、毘陀和よ、端正な青年が美しく身を飾り終えてから⁽⁴²⁾、きれいな器に満たされたよい麻油⁽⁴³⁾、あるいはよい器に満たされたきれいな水、あるいは磨いたばかりの鏡、あるいは傷のない水晶に映った姿を自分で見ようと思ひ、そこに自分を映して、隅々まで自分の像を見る。毘陀和よ、どう思うか。この麻油や水や鏡や水晶という場所にその〔青年〕自らが映し出した像は、〔麻油などの〕外から入ってきた、〔あるいはそれらの〕中〔から出てきた〕のだろうか」と。

毘陀和は答えた。「世尊よ、そうではありません⁽⁴⁴⁾。麻油や水晶や水や鏡の浄らかさによって⁽⁴⁵⁾、自分で自分の像を見ているに過ぎません。その像は〔麻油などの〕中から出てくることもなく、外から入ってくることもありません」と。

(3L: T 13, 905c25-906a01) 仏陀は言った。「すばらしい、すばらしい。毘陀和よ、その通りである。毘陀和よ、〔麻油などの〕物質(色)が清浄だから、それに映ったものも清浄なのである。仏を見たいと思えば見る。見れば質問する。質問すれば〔仏が〕答えてくれる。教えを聞けば大いに喜んで、次のように考える。『仏はどこからやって来たのか。私がどこかへ行ったのか』と。〔そして〕『仏がどこからやって来たのでもなく、私がどこかへ行ったのでもない』と自らで考える。〔さらに〕『欲界、色界、無色界の三界は心が作ったものでしかない。私は思考した (**vi-Kīp*⁽⁴⁶⁾) ものを見ているのである』と自らで考えるのである」

(3N⁽⁴⁷⁾: T 13, 906a01-a07) 「心が仏となり、心自らが〔仏を〕見る。心が仏である。心が如来である⁽⁴⁸⁾。心は我が身である。心が仏を見る。心自らは心を知らない。心自らは心を見ない。心に表象があれば〔それが〕無明である。心に表象がなければそれが涅槃である。この〔三界に属する〕ものに楽しむべきものはなく、すべて思考が作りだしたものである。たとえ思考があるとしても空に他ならない。たとえ思考があるとしても、〔その思考に〕もまったく実在性はない⁽⁴⁹⁾。このように毘陀和よ、菩薩が三昧の中にとどまっている時に見ている対象とは以上のようなものである」と。

(3O: T 13, 906a07-a11) その時、仏陀は偈頌を説いて言った。

心は心を知らない。心は心を見ない。

心が表象を起せば無明であり、表象がなければ涅槃である。

この〔三界に属する〕ものに堅固さはなく、常に思考の中にとどまっている。

理解でもって空と見れば、すべてにおいて表象はない〔と知る〕。

(「行品」完)

〔注〕

- (1) 和訳と訳注の作成にあたっては五島清隆先生から多くのご指摘を賜りました。ここに感謝申し上げます。
- (2) cf. Harrison 1978, 末木 1989.
- (3) cf. 望月 1930, 310, 静谷 1974, 302-303, 藤田 1970, 223-224, Harrison 1978, 43, 大田 1983, 138, 玉城 1981, 94-103.
- (4) cf. 梶山 1992, 293-297.
- (5) cf. 吹田 2016.
- (6) 例えば本経には以下のような一節 (PSS 15M-15N) が見られるが、そのような文脈で阿弥陀仏を作意するよう説くことはない (cf. PSS 3A-3B)。

無相の入り口 (**animitta-praveśā*) に入らなければならない。バドラパーラよ、それはなぜかという、実体の想 (**saṃjñā*) を具えた者は仏を見ることがないからである。

mtshan ma med pa'i 'jug pa la 'jug par bya'o// bzang skyong/ de ci'i phyir zhe na/ 'di ltar dngos po'i 'du shes can gyis ni sangs rgyas mthong bar mi 'gyur ro//
- (7) 高麗版に関しては『高麗大蔵経』第七巻と『高麗大蔵経初刻本輯刊』巻五巻に所収の『般舟三昧経』を参照した。
- (8) この三昧の原語は **pratyutpanna-buddha-saṃmukhāvasthio nāma samādhiḥ* であり、蔵訳 *da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin* からの還梵である。これまで *pratyutpanna-buddha-saṃmukhāvasthia-samādhi* という複合語に関して二通りの解釈が提示されている (cf. Harrison 1990. see also 梶山 1992, 239-242, 林 1994)。一つには *pratyutpanna-buddhānām saṃmukhaṃ avasthitasya samādhiḥ* と解釈し、「現在諸仏の面前に立つ人の三昧」と理解する。二つには *pratyutpanna-buddhānām [bodhisattvasya] saṃmukhaṃ avasthitānām samādhiḥ* と解釈し、「現在諸仏が〔菩薩の〕面前に立つ三昧」と理解する。Harrison (1990, 3. fn. 1) は以上の二つを提示した上で前者を取っている。まず *buddha* を複数形で理解しているが、支婁迦讖も「現在諸佛悉在前立」と訳しており、般舟三昧の対象が古くから諸仏であると考えられていたのは疑いない。しかし近年では本経の原初形態が想定され (末木 1989)、その部分 (i.e. 行品) にのみ現れる阿弥陀仏のみが本来の対象であった可能性が提示されている (梶山 1992, 293-297)。複合語の中で語幹へと還元された *buddha* が、必ずしも複数形であると決定することはできないだろう。続いて *avasthita* に関して、*avasthitasya* といった格を想定して「〔面前に〕立つ人の」と理解しているが、これには疑問が残る。第一に *pratyutpanna-buddha-saṃmukhāvasthito nāma samādhiḥ* というのが本来の形である。これは〈十地経〉に見る般舟三昧が *pratyutpannasarvabuddhasaṃmukhāvasthitaś ca nāma bodhisattvasamādhiḥ* (DBh 179, 4) と記されていることから確認できる。さらに〈三昧王経〉における所説の三昧が *sarvadharmasvabhāva-samatāvīpañcito nāma samādhiḥ* (SRS I 15, 9) と記され、この他に〈八千頌〉(ASP 940, 21-942, 5) に列挙される六十二種の三昧や、Mvy (No. 506-623) に挙げられる三昧も皆同様の形で記されている。これらの用例に鑑みると、*avasthita-samādhiḥ* という複合語は *avasthito nāma samādhiḥ* の省略形とみなしなければならない。そして A nāma B という場合、A の格は B に依存する (e.g. *samādhirājam nāma samādhim*: AAA 12, 14, *padmā nāma lokadhātur*. KarP 7, 18)。したがって省略形を解釈する際にも、*avasthitasya* のような格限定複合語ではなく、同格限定語として解釈しなければ齟齬をきたすことになるだろう。いずれにせよ事物の名前を複合語の解釈から正確に捉え

ることは難しい。「現在仏が面前に立つという三昧」と意識しておくのが最も穏当である。

(9) 漢訳はすべて「阿弥陀」と音写する。蔵訳は *tshe dpag med* とする。

(10) 原文は「心念」。蔵訳対応箇所には *sems bskyed par bya'o'* とある。「心念」の語は『道行経』にも出る。

cf. Karashima 2010, 543: 心念 (xīn niàn) “thought”

HD. 7.377b(水経注 etc.)

Lk. 457a9. 菩薩求般若波羅蜜、…… 求之、若守者、發心念、持是功德施與作阿耨多羅三耶三菩。(p)

AS. 174.22 = R. 350.18 = AAA. 714.16. *manasikāra~ ... cittotpāda~* (“the mental activities, the productions of thought” [AsP.tr.II 212 = AsP.tr. 133]); ZQ. 496b13. 念發心; Zfn. 529c19. 發心; Kj. 567a14. (是)念、(是)心; Xz(I). 830c17. 作意…起心; Xz(II). 904b21 = Xz(I); not found at Sh. 646a9.; Tib. Pk. 208a3 = D. 193a5. *yid la byed pa ... sems bskyed pa.*

(11) 原文は「隨所聞當念」。蔵訳相当箇所には *ji skad du thos pa'i rnam pas...yid la byed de/* とある。

(12) 原文は「去是間千億萬佛刹」。「是間」の語は『道行経』にも出る。

cf. Karashima 2010, 441-442: 是間 (shì jiān) “here” Cf. 彼間 (bǐ jiān), 此間 (cǐ jiān), 彼所 (bǐ suǒ), 是中 (shì zhōng)

not found at HD. 5.661.; Chen Wenjie 1999: 17f. ≡ 2002a: 110f.(道行般若經 etc.), Hu 2002: 114(阿闍世經), Long 2004 : 33(摩訶般若抄經), YY 24.2(2004): 95(十誦律), YL 35(2007): 313(支婁迦讖譯)

Lk. 428a18. 菩薩亦不念彼間、亦不於是間念、亦不無中央念。(p)

AS. 12.30 = R. 25.6f. = AAA. 109.13f. *pūrvāntato ... aparāntato* (“from where it begins, ... where it ends” [AsP.tr.II 92 = AsP.tr. 10]); ps-ZQ. 481b1. 於始…於終; Zfn. 511a4. 本…當來; Kj. 539b6. 過去世…未來; Xz(I). 767c2. 前際…後際; Xz(II). 869a10. 前際、後際; Sh. 590c27. 前、後、(中)際; Tib.Pk. 14b8 = D. 14b1. *sngon gyi mthar ... phyi ma'i mthar.*

Lk. 429c5. 阿羅漢道不動成就、不當於中住。阿羅漢道成已、不當於中住。何以故? 阿羅漢道成已、便盡是間、無處所、於泥洹中般泥洹。是故阿羅漢道不當於中住。(p)

AS. 18.29 = R. 36.16 = AAA. 143.4. *iha* (“here”); not found at ZQ. 482c6.; Zfn. 512a30. 是間; Kj. 540b17. 今世; Xz(I). 770b4. 今世; Xz(II). 870c7. 今世; Sh. 592c9. 現世; Tib. Pk. 22a4 = D. 21a5. *'di (nyid) du.*

Lk. 435a2. 十方無央數佛國諸天人、諸龍、阿須倫、諸閻叉鬼神、……諸摩睺勒鬼神、諸人、諸非人都盧賜來到是間、問訊法師、聽受般若波羅蜜。(p)

not found at AS. 44.10 = R. 88.3 = AAA. 257.16.; not found at ZQ. 485a8.; Zfn. 516c29. 是間; not found at Kj. 544c22.; Xz(I). 780b15. 此; Xz(II). 876c15. 此; not found at Sh. 600c27.; not found at Tib. Pk. 52b8 = D. 50a3. (他五例あり)

(13) 原文は「其國名須摩提」。蔵訳対応箇所には *'jig rten gyi khams bde ba can* とある。この「須摩提」から原語が *Suhamadi* のようなガンダーラ語の音韻で記されていたことが想定されている (cf. 藤田 1970, 432-433)。これと同じ音写語は T. 419 にも見られる。

(14) 原文は「譬如人臥出」。「臥出」の語は『道行経』にも出る。

cf. Karashima 2010, 506: 臥出 (wò chū) “sleeps, falls into a (deep) sleep”

not found at HD. 8.722.; ZY 282(2001, No.3): 260f(安世高譯、道行般若經 etc.), Cao Xiaoyun 2001 : 80 = 2005a: 590 = 2005b: 155f.(六度集經), Chen Wenjie 2002a: 86f.(道行般若經, 內藏百寶經 etc.), Li Weiqi 2004: 319f.(道行般若經 etc.), Wang Yunlu 2006: 95f.(道行般若經 etc.); cf. HYJ 10(2007): 31f. 寢 / 臥.

Lk. 470c28. 時菩薩臥出。天人於夢中語言：“汝當求索大法！”覺起、即行求索、了不得。其意惆悵不樂。(p)

not found at AS. 238.6 = R. 481.9 = AAA. 927.11.; ZQ. 503c-2. 臥出; not found at Zfn.; not

found at Kj. 580a-4.; not found at Xz(I).; not found at Xz(II).; not found at Sh. 668a27.; not found at Tib. Pk. 283b7 = D. 261a6.

- (15) 原文は「無輩(←背)」。藏訳対応箇所には *mi mthun pa med pa* とある。
 (16) 原文は「念夢中所見」。藏訳対応箇所には *de rmi lam gyi mtshan ma rjes su dran pas...* とある。
 (17) 原文は「一心念。若一晝夜。若七日七夜」。藏訳対応箇所には *nyin zhag gcig gam/... nyin gzhang bdun du yid la bya'o//* とある。
 (18) 原文は「心當作是念時」。藏訳相当箇所には *de ltar de ltar sems bskyed de/* とある。
 (19) 原文は「幽冥之處」。藏訳対応箇所には *'jig rten gyi bar* (**lokāntarika*) とある。中間の世界 (*lokāntarika*) とは世界と世界との間にある真つ暗な場所のことであるが、神通力に頼らなければこれを超えることはできないとされている。例えば〈十地経〉(DBh 118, 11-13) は中間の世界に関して以下のように説いている。

ああ、実に勝者の息子たちよ、例えば、雑染と清浄の世界と、完全に清浄な世界、二つの世界にある中間の世界 (*lokāntarika*) は、偉大な神通力の力を除いて、越え難い。

tadyathāpi nāma bho jinaputrā dvayor lokadhātvoḥ saṃkliṣṭaviśuddhāyās ca lokadhātor ekāntapariśuddhāyās ca lokadhātor lokāntarikā duratikramānyatra mahato 'bhijñābalādhānāt.

尚、この他に〈法華経〉(SP 163, 8)、〈悲華経〉(KarP 5, 8-13) にも言及がある。

- (20) 「墮舍利」の語は『道行経』にも出る。
 cf. Karashima 2010, 142-143: 墮 舍 利 (duò shè lì; EH. hjiwei śja- ljiəi- > QYS. xjwie śja- li-) a transliteration of Skt. *Vaiśālī* (name of a city)

Lk. 434a11. 釋提桓因作是念：“弊魔乘四馬之車來欲到佛所。是弊魔車馬、無異。非國王并沙四馬車、不類；亦非國王波斯匿四馬車、不類；亦非釋種四馬車、不類；亦非墮舍利*四馬車、不類。是弊魔所作。晝夜弊魔常索佛便、常亂世間人。”(p)

* 墮: only Kr reads 墮 (= Zfn. 516a19), while other editions, incl. J, read 隨 instead. For 墮, corresponding to Skt. *vai, ve* in the Eastern Han Chinese translations, see Coblin 1983: 69. For the confusion of 墮 / 隨, cf. HX 2(2002): 40.

≠ AS. 39.19 = R. 78.15 = AAA. 243.20. *Licchavi*; ZQ. 484c6. 維耶利; Zfn. 516a19. 墮舍利; Kj. 544a10. 黎車; not found at Xz(I). 778b26.; not found at Xz(II). 875b27.; not found at Sh. 599b7.; Tib. Pk. 47a6. *Li tsabyi*, D. 44b6. *Li tstsha bī*.

- (21) 原文は「往到其所」。「往到」の語は『道行経』にも出る。

cf. Karashima 2010, 490-491: 往到 (wǎng dào) “visits, goes over” Cf. 來到 (lái dào)

not found at HD. 3.937; Hu 2002: 294(道行般若経), HX 5(2005): 283(支婁迦讖譯), Cui 2005: 94(道行般若経), HYJ 9(2006) 13(義淨譯), ZY 315(2006, No.6), p. 523(道行般若経)

Lk. 434c23. 天上四天王天上諸天人索佛道者、往到彼所、問訊、聽受般若波羅蜜、作禮遶竟已(←以)、去。忉利天上諸天人索佛道者、往到彼所。問訊、聽受般若波羅蜜、作禮遶竟已、去。鹽天上諸天人索佛道者、往到彼所、問訊、聽受般若波羅蜜、作禮遶竟已、去。(p)

AS. 42.26 = R. 85.7 = AAA. 254.12. (*tatra*) *āgantavyam* (“[they] will come [there]”); ZQ. 485a14. 往; Zfn. 516c20. 到(彼所); Kj. 544c6. 來至(般若波羅蜜所); Xz(I). 780b6. 來(此處); Xz(II). 876c7 = Xz(I); Sh. 600c4. 往詣(其所); Tib. Pk. 51a4 = D. 48a7. (*der*) *'ong ba*. (他三例あり)

- (22) 「羅閱祇」の語は『道行経』にも出る。

cf. Karashima 2010, 316: 羅閱祇 (luó yuè qí; EH. la źjwat gjei[tsjei] > QYS. lâ jiwät gje[tsje]) a transliteration of Skt. *Rājagṛha* (name of the ancient capital city of Magadha)

Krsh(2001).418(STF).

Lk. 425c4. 佛在羅閱祇耆闍崛山中。摩訶比丘僧不可計——諸弟子舍利弗、須菩提等；摩訶[薩]菩薩無央數——彌勒菩薩、文殊師利菩薩等。月十五日說戒時。(p)

AS. 1.4 = R. 3.12 = AAA. 2.1. *Rājagṛha*~; ps-ZQ. 478b-7. 王舍(國); Zfn. 508b-9 = Lk; Kj. 537a-5. 王舍(城); Xz(I). 763b5 = Kj; Xz(II). 865c5 = Kj; Sh. 587a7 = Kj; Tib. Pk. 1b4 = D. 1b2.

rGyal po'i khab.

Lk. 478b9. 佛說是《般若波羅蜜》時、在羅閱祇耆闍崛山中、在衆弟子<中>央坐。佛年三十得佛。十二月十五日過食後、説經。(p)

not found at AS. 261.5 = R. 529.9 = AAA. 991.4; ZQ. 508b9. 王舍; not found at Zfn.; not found at Kj. 586c3; not found at Xz(I); not found at Xz(II); not found at Sh. 676c10; not found at Tib. Pk. 311b6 = D. 285b6.

- (23) 原文は「同時念」。蔵訳相当箇所には *de dag phyi phyir zhing de yid la byed bzhin du...* とある。
- (24) 原文は「其覺已各自念之」。蔵訳相当箇所には *de dag sad nas ji ltar mthong ba dang/ thos pa dang/ shes pa dang/ rtogs pa'i rmi lam na myong ba rjes su dran nas/* とある。
- (25) 原文は「我持三人以付」。T. 417 は「我持是三女人以爲喩。汝持是事爲人説經」としており、今はこの読みにしたがって訳した。T. 419 は「爲汝説如是。從是因縁如是法説」とするのみであるが、T. 416 ならびに蔵訳では颯陀和が譬えに現れた三人の男の爲に無上正等覺から退転しないような教えを説き、そして仏陀がその三人が「善覺」という仏になると預言している。また『大智度論』第七卷に見る対応箇所 (T. 25, 110b17-19) においても「颯陀婆羅答言。諸法實爾。皆從念生。如是種種。爲此三人方便巧説諸法空。是時三人即得阿鞞跋致」となっており、ここでも颯陀婆羅 (i.e. 颯陀和) が三人の男を不退転に導いたことになっている。したがって原文中の「三人」を三人の男と理解して読むことも可能である。
- (26) 原文は「使解此慧」。「慧」の語は『道行經』で *artha* を意味する場合があると報告されている。cf. Karashima 2010, 230-231: 慧 (hui) “wisdom” or “meaning” (?; a translation of Skt. *artha*~ [“matter, thing; wealth, property; advantage, use; sense, meaning, notion”]) Cf. 事 (shi)
Lk. 451b22. 若復有菩薩從兜術天上來生是間、或從彌勒菩薩聞是深經中慧、今來生是間、持是功德今逮得深般若波羅蜜。(p)
AS. 142.20 = R. 285.9 = AAA. 582.23. *prajñāpāramitā*~; ZQ. 492c16. 慧; not found at Zfn.; Kj. 560a13. 般若波羅蜜; Xz(I). 819c3. 深般若波羅蜜多; Xz(II). 896c9 = Xz(I); Sh. 634a18. 甚深般若波羅蜜多正法; Tib. Pk. 171a1 = D. 158a7. *shes rab kyi pha rol tu phyin pa*.
Lk. 451b25. 若復有菩薩前世佛時、聞深般若波羅蜜、不問中慧、來生是間、聞深般若波羅蜜、心便有疑、不信樂、不問中慧。(p)
not found at AS. 142.22f = R. 285.11f. = AAA. 583.2f; ZQ. 492c18f. 中慧…中事; not found at Zfn.; Kj. 560a15. 其義; Xz(I). 819c7. 甚深義趣; Xz(II). 896c12 = Xz(I); Sh. 634a23. 其義; not found at Tib. Pk. 171a2f. = D. 158b1f.
Lk. 451b27. 若復有菩薩、前世聞深般若波羅蜜、問中慧一日、二日、三日若至七日、持是功德今復逮得深般若波羅蜜、…… (p)
AS. 142.29 = R. 285.19 = AAA. 583.17; ZQ. 492c20 = Lk; not found at Zfn.; Kj. 560a20. 其中事; Xz(I). 819c12. 甚深義趣; Xz(II). 896c16. 其中義趣; Sh. 634a29. 其義; not found at Tib. Pk. 171a6 = D. 158b4. (他七例あり)

(27) 原文は「數數念」。蔵訳対応箇所には *des phi phir zhing yid la byed pas...* とある。

(28) 原文は「常當守念」。この場合の「守」は修するという意味で理解する。

cf. Karashima 2010, 448-453: 守 (shōu) “cultivates, develops; practises” Cf. 守入 (shōu rù), 入 (rù)(2), 自守 (zì shōu)

HD. 3.1296a(11)(尚書 etc.); DK. 3.902d(2)(イ)(左傳 etc.)

Lk. 426a7. 當聞般若波羅蜜、當學、當持、當守。欲學辟支佛法、當聞般若波羅蜜、當學、當持、當守。欲學菩薩法、當聞般若波羅蜜、當學、當持、當守 (p)

AS. 4.2 = R. 6.15 = AAA. 41.22. *yogam āpattavyam* (“one should ... exert oneself” [AsP.tr.II 84 = AsP.tr. 2]); ps-ZQ.479a7-; Zfn. 508c27 = Lk; Kj. 537b23. 如説修行; Xz(I). 764a4. 修(學); Xz(II). 866a26 = Kj; Sh. 587b28 = Kj; Tib. Pk. 3b8 = D. 3b3. *rnal 'byor du bya'o*.

Lk. 426c8. 作是守行者、爲不守般若波羅蜜、爲不行般若波羅蜜、若想行者。菩薩護行、當莫隨其

中。(p)

≠ AS. 6.26f. = R. 12.8f. = AAA. 57.27f. *evaṃ carati sa prajñāpāramitāyāṃ carati sa prajñāpāramitāṃ bhāvayati* (“he who courses thus, courses in perfect wisdom and develops it.” [AsP.tr.II 86 = AsP.tr. 4]); ps-ZQ. 479c15. 如是行、如是惟、爲惟行此道; Zfn. 509b24. 行是守行般若波羅蜜、爲不行般若波羅蜜; Kj. 538a19. 能如是行者、是行般若波羅蜜; Xz(I). 765a22f. 若能如是行、是修行般若波羅蜜多; Xz(II). 867a24f. 能如是行者、是修行般若波羅蜜多; Sh. 588c8. 如是行、乃名行般若波羅蜜多; Tib. Pk. 7b1f. = D. 7a2. *gang de ltar spyod pa de ni shes rab kyi pha rol tu phyin pa la spyod pa ste de ni shes rab kyi pha rol tu phyin pa sgom par byed pa yin no.*

Lk. 437b22. 其人當從是學、深入般若波羅蜜中、學智慧(= v.l. ←惠)般若波羅蜜、轉增多守、無有極智悉成就、得其福轉倍多。(p)

AS. 65.19f. = R. 129.2 = AAA. 315.27f. (*paññāpāramitāṃ bhāvayan vṛddhiṃ virūḍhiṃ vipulatāṃ gataḥ*) (“While developing [the perfection of wisdom], he obtained the growth, increase, and abundance [of it]” [cf. AsP.tr.II 122 = AsP.tr. 41]); not found at ZQ. 486a12; Zfn. 519b3. 轉增益多守; Kj. 547a20f. 當能修習(般若波羅蜜)……增廣流布; Xz(I). 786c5f. 修(般若波羅蜜多)、疾得圓滿; Xz(II). 879c17. 修行(般若波羅蜜多)、疾得圓滿…廣行流布; Sh. 607b2f. 修學相應、堅固、增長、廣大、圓滿; Tib. Pk. 77b5 = D. 72b7. *sgom pa dang 'phel ba dang rgyas pa dang yangs par gyur pas.* (他二十六例あり)

(29) 原文は「常念我數數。常當守念。莫有休息。如是得來生我國」。藏訳相当箇所には *sangs rgyas rjes su dran pa kun tu bsten/ nges par bsten cing bsgoms la mang du byas na/ 'jig rten gyi khams 'dir skye bar byed do// sangs rgyas rjes su dran pa kun tu bsten/ nges par bsten cing bsgoms la mang du byas na/ sangs rgyas kyi zhing 'dir skye bar 'gyur ro//* とある。

(30) 原文は「如是爲念佛」。藏訳対応箇所には *de ni sangs rgyas rjes su dran pa zhes bya ste/* とある。

(31) 原文は「於三昧中誰當證者」。「證」の語は *pra-Āp* と *sākṣāt-Kṛ* の訳語である可能性がある。ここでは後者の意味で理解する。

cf. Karashima 2010, 634-635: 證(zhèng)(1) “realisation, actualisation, attainment of the fruit” Cf. 證得(zhèng dé)

HD. 11.429b(6)(唐代); DK. 10.583b(8)(唐代); Krsh(2001). 362(“realises, attains, reaches”)

Lk. 429c25. 已得須陀洹道證、若於中住不樂、因出去。已得斯陀含道證、若於中住不樂、因去。

(p)

AS. 20.1 = R. 38.21 = AAA. 156.22. *srotaāpatti-phalaṃ* (R. *śrotaāpatti-phalaṃ*) *prāptu-(kāma~)* (“[wants] to attain the fruit of a Streamwinner”); ZQ. 482c24. 溝港; Zfn. 512b19. 得須陀洹道證; Kj. 540c2. 證須陀洹果; Xz(I). 770c21. 證…預流; Xz(II). 870c28 = Xz(I); Sh. 593a13. 得須陀洹果; Tib. Pk. 23b1f. = D. 22b2. *rgyun tu zhugs pa'i 'bras bu thob par ('dod pa)*

Lk. 429c29. 已([v.l.] ←以)得佛道證、若於中住不樂、因去。(p)

AS. 20.5 = R. 39.4 = AAA. 156.28. *anuttarāṃ samyaksambodhiṃ prāptu-(kāma~)* (“[wants] to attain unsurpassed, perfect enlightenment”); ZQ. 482c25. 無上正眞道; Zfn. 512b25. 得佛道證; Kj. 540c5. 證佛法; Xz(I). 770c21f. 證……諸佛無上正等菩提; Xz(II). 870c28f. = Xz(I); Sh. 593a17. 得阿耨多羅三藐三菩提果; Tib. Pk. 23b4 = D. 22b4. *bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub thob par ('dod).* (他一例あり)

證(zhèng)(2) “realisation, assurance”

HD. 11.429.*

Lk. 457c11f. 舍利弗言：“彌勒菩薩！所說爲得證？”彌勒言：“不也。我所說法不得證。”(p)

AS. 178.8 = R. 360.7 = AAA. 736.8. *sākṣāt-kṛta~ ... sākṣāt-kṛta~* (“[Maitreya, have you then perhaps really] witnessed [those dharmas in the way in which you teach?]” [AsP.tr.II 216 = AsP.tr. 138]); ZQ. 496c25. 有證…得證; Zfn. 530c8. 已得證…得證; Kj. 567c23. 證…證得; Xz(I).

832b26. 所證…所證; Xz(II). 906a3 = Xz(I); Sh. 647b11. 證…證; Tib. Pk. 212b2 = D. 197b1.
mngon sum du byas ... mngon sum du (ma) byas te.

Lk. 458b-7. 須菩提言: “佛所說: ‘不於空中作證’。云何菩薩於三昧中住、於空中不得證?” (p)

AS. 183.9 = R. 370.13 = AAA. 750.4. *sūnyatā na sākṣātkaroti* (“[How does a Bodhisattva ...] not realise emptiness?” [AsP.tr.II 222 = AsP.tr. 143]); ZQ. 497b18. 不得證; Zfn. 531b9f. 不以空作證耶; Kj. 568c18. 不證空; Xz(I). 834a23. 不作證; Xz(II). 907a16 = Xz(I); Sh. 649a20. 不證空耶; Tib. Pk. 217b7 = D. 202b3. *stong pa nyid mngon sum du mi bgyid.* (他二例あり)

(32) T. 418に見られない内容が他の資料には説かれている。その内容を蔵訳にしたがって示すと、「その菩薩は、この三昧を修習し、そしてこの三昧に入った後、その三昧から出て、バドラパーラよ、汝のいるところへ向かい、やって来たところで、この三昧を説いた。バドラパーラよ、そこで汝は、その菩薩が決して無上なる正等覚から退転しなくなるような、そのような教えを説いたのである。そこで私も、その男(菩薩)が、将来に如来、阿羅漢、正等覚者なる「弁才を獲得した者」(*Prāptapratibhāna?, cf. Harrison 1990, 38. fn. 13)という仏陀となるだろう、と授記(*vyākaraṇa)した。バドラパーラよ、汝自身と、長老マハーカーシャパ、インドラグッタ菩薩、スシーマ菩薩と、その他にもこの三昧を獲得した菩薩たちは、この三昧に対する自在者(*vasībhūta)である」とあり、他の資料では授記が説かれている。

(33) 「須波日」と呼ばれる仏に関して、これは T. 416にも同じ音写語で出ている。しかし T. 419ならびに蔵訳には言及されていない。

(34) 原文は「入大空澤中」。「空澤」の語は『道行経』にも出る。

cf. Karashima 2010, 294: 空澤(kòng zé) “a vast vacant marsh” Cf. 空閑處(kòng xián chù)

not found at HD. 8.425.; not found at DK. 8.649.

Lk. 445a27. 譬如男子行萬里。天中天! 若數萬里者、到大空澤中。(p)

AS. 107.17 = R. 215.19 = AAA. 471.8. *aṭavi-kāntāra~* (“a huge wild forest” [AsP.tr.II 156 = AsP.tr. 76]); ZQ. 489c17. 大深澤; not found at Zfn.; Kj. 554b7. 險道; Xz(I). 806c18. 曠野……嶮道; Xz(II). 888c1. 曠野……險道; Sh. 621b12. 曠野險路; Tib. Pk. 129a5 = D. 120a3. *'brog dgon pa.*

Lk. 448b9. 其處無穀、有虎狼、多賊、大(? ←五) 空澤。我樂往至彼間。(p)

AS. 122.13 = R. 247.19 = AAA. 522.2. *pāṇiya-kāntāra~ durbhikṣa-kāntāra~* (“a wild place where there is neither food nor water” [cf. AsP.tr.II 169 = AsP.tr. 90]); ZQ. 491a18. 五空澤間; not found at Zfn.; Kj. 557a26. 無水之處; not found at Xz(I). 813b-12.; not found at Xz(II). 892b8.; Sh. 627b21. 飢饉、枯涸、險難等處; Tib.Pk. 146b5 = D. 136b2. *chu'i dgon pa dang mu ge'i dgon gang na yod pa.*

Lk. 461b10. 是無有漚愁拘舍羅菩薩正使於百千踰(←由) 旬空澤中、在其中行、…… 不知是遠離法、會無所益。(p)

AS. 195.5 = R. 393.5 = AAA. 781.15. *aṭavi-kāntāra~* (“deserted forests” [AsP.tr.II 234 = AsP.tr. 156]); ZQ. 499a15 = Lk; Zfn. 534b15 = Lk; Kj. 571a16. 空曠之處; Xz(I). 838c19. 曠野; Xz(II). 909c19. 深山野; Sh. 653b10. 曠野; Tib. Pk. 231a5 = D. 214b7. *'brog dgon pa.*

(35) 原文は「逮得無所從生法樂」。蔵訳対応箇所には *mi skye ba'i chos la bzod pa thob par gyur to//* とある。「無所從生法樂」の語は『道行経』にも出る。

Cf. Karashima 2010, 513: 無所從生法樂(wú suǒ cóng shēng fā lè) “the delight of (the principle of) non-arising dharmas” (樂 is a translation of BHS. *kṣānti* [“intellectual receptivity; predilection, preference; delight”]) Cf. 樂(lè).

not found at HD. 7.119.; not found at DK. 7.441.; cf. Krsh(1998). 472. 無所從生法忍.

Lk. 451a14. 佛說是經時、……二(←三) 十菩薩皆逮得無所從生法樂、皆當於是婆羅劫中受決。(p)

AS. 139.29 = R. 280.17 = AAA. 575.8. *anutpattikeṣu dharmeṣu kṣāntiḥ* (“the acceptance of [the principle of] non-arising dharmas” [cf. AsP.tr.II 181 = AsP.tr. 102]); ZQ. 492b.-8 = Lk; not

- found at Zfn.; Kj. 559b26. 無生法忍; Xz(I). 818c5 = Kj; Xz(II). 896a16 = Kj; Sh. 633a23 = Kj; Tib. Pk. 168a7 = D. 156a3. *mi skye ba'i chos la bzod pa.*
- Lk. 453c1. 五百諸天人皆逮無所從生法樂、於中立。(p)
AS. 155.3 = R. 310.2 = AAA. 644.2. *do.*; ZQ. 494a12 = Lk; Zfn. 525c3. 無所從生法樂忍; Kj. 562c29. 無生法忍; Xz(I). 823c28 = Kj; Xz(II). 899b19 = Kj; Sh. 639a8 = Kj; Tib. Pk. 185b4 = D. 172b2. *do.*
- Lk. 456a21. 如是菩薩逮無所從生法樂、於中立。(p)
AS. 169.13 = R. 339.18 = AAA. 692.8. *do.*; ZQ. 495c22 = Lk; Zfn. 528c16. 無所從生法樂忍; Kj. 565c25. 無生忍; Xz(I). 828c24 = Kj; Xz(II). 903a11 = Kj; Sh. 643c27. 無生法忍; Tib. Pk. 202a1 = D. 187b5. *do.* (他三例あり)
- (36) 原文は「菩薩其所向方聞現在佛。常念所向方」。蔵訳相当箇所には *phyogs gang dang gang na de bzhin gshegs pa bzhugs par thos pa'i phyogs de dang de logs su de bzhin gshegs pa de yid la byas na/* とある。
- (37) 原文は「我所立如想空」。蔵訳相当箇所を参照すると「その〔菩薩は〕虚空の想 (**saṃjñā*) を確立しつつ、仏の想をよく作意することによって」*de nam mkha'i 'du shes la shin tu gnas shing sangs rgyas kyi 'du shes shin tu yid la byas pas/* とある。
- (38) 原文は「當念佛立如以珍寶倚琉璃上」。この譬えは難解である。琉璃の台の上に珍しい宝石を置いた様子を言っているのか。T. 419 は「淨如琉璃寶中尊」、T. 416 には「得見彼佛光明清徹如淨琉璃」とある。また蔵訳相当箇所には「バイドゥールヤの像 (**pratimā*, see Harrison 1990, 39. fn. 17) のように美しい如来を、その菩薩は目の当たりに見ることができるだろう」*de bzhin gshegs pa bai dū rya'i sku gzugs lta bu bzang po byang chub sems dpa' des mngon sum du mthong bar 'gyur te/* とある。少なくとも、仏の立ち姿が光り輝いて美しい様子(金色相/丈光相)を猫目石のような宝石で表現した、あるいは宝石の光の反射のように実体のないことを表現したものであることは理解できるが、具体的な内容は不明である。同じような譬えは「行品」にもう一箇所(T 13, 905c09)と「請佛品」(T 13, 916a13-14)にも見られる。
- (39) 原文は「念本郷里家室親屬財産」。蔵訳相当箇所には *rang skyes pa'i yul de rjes su dran nas/* とある。
- (40) 原文は「菩薩其所向方聞現在佛。常念所向方」。蔵訳相当箇所には *byang chub sems dpa' sems dpa' chen po khim pa 'am rab tu byung ba yang rung/ phyogs gang dang gang na de bzhin gshegs pa bzhugs par thos pa'i phyogs de dang de logs su dran pa dang ldan zhing sems g-yeng ba med pas sangs rgyas mthong ba thob par bya ba'i phyir de bzhin gshegs pa de yid la bya'o//* とある。
- (41) 原文は「持佛威神力」。蔵訳対応箇所には *sangs rgyas kyi mthu* とある。「威神」の語は『道行経』にも出る。
- cf. Karashima 2010, 491: 威神 (wēi shén) “imposing, supernatural dignity” Cf. 威神力 (wēi shén lì)
HD. 5.221b(漢書); DK. 3.703c(漢書); Krsh(2001). 276.
Lk. 425c10. 舍利弗心念言：“今使須菩提爲諸菩薩說般若波羅蜜。自用力說耶？持佛威神說乎？”
(p)
AS. 2.6 = R. 4.3 = AAA. 28.3. (*buddha*)-*anubhāva*~ (“[through the Buddha’s] might” [AsP. tr.II 83 = AsP.tr. 1]); ps-ZQ. 478b-1. (佛) 聖恩; Zfn. 508b-1 = Lk; Kj. 537b2. (佛) 神力; Xz(I). 763b16. (如來) 威神之力; Xz(II). 865c14. (如來) 威神之力; Sh. 587a-11. (佛) 威神及加持力; Tib. Pk. 2a6 = D. 2a3. (*sangs rgyas kyi*) *mthus*.
- Lk. 426c21. 持佛威神須菩提說是語：“菩薩皆得阿惟越致字、前過去佛時：‘得作佛’。……”(p)
AS. 7.14 = R. 13.12 = AAA. 60.21. *do.*; ps-ZQ. 480a7. (佛) 聖旨; Zfn. 509c8 = Lk; Kj. 538b1 = Lk; Xz(I). 765b11. (佛) 神力; Xz(II). 867b11 = Xz(I); Sh. 588c29 = Lk; Tib. Pk. 8a5 = D. 7b5. *do.*
- Lk. 430b17. 釋提桓因問尊者須菩提：“持何威神恩、當學知？”(p)
AS. 22.18 = R. 44.6 = AAA. 172.10. *anubhāva*~ ...*adhiṣṭhāna*~ (“might ... authority” [AsP.tr.II

100 = AsP.tr. 19]); ZQ. 483b3 = Lk; Zfn. 513a13 = Lk; Kj. 541a20. 神力; Xz(I). 771c11. 神力爲依持; Xz(II). 871c2 = Xz(I); Sh. 593c28. 神力所加持; Tib. Pk. 26b1 = D. 25a5. *mṭhu ... byin gyi ṛlabs*.

- (42) 原文は「端正姝好莊嚴」。「姝好」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 457: 姝好 (shū hǎo) “beautiful”

HD. 4.342b(法華經); Krsh(1998). 417, Krsh(2001). 249, 422(STF)

Lk. 470b6. 譬如月盛滿姝好。菩薩隨般若波羅蜜教、當如是。(p)

not found at AS. 235.31~237.7 = R. 477.11~479.20 = AAA. 901.13~913.5; ZQ. 503b22. 好 ([= v.l.] ← 如); not found at Zfn.; not found at Kj. 579c14~580a15.; not found at Xz(I). 860c21~865a14.; not found at Xz(II); not found at Sh. 667b27~668a8.; not found at Tib. Pk. 281a2~283a4 = D. 258b7~260b4.

Lk. 473a20. 是何等臺? 交露七寶服飾姝好乃爾。(p)

not found at AS. 250.10 = R. 507.3 = AAA. 955.21.; ZQ. 505a29. 姝好; not found at Zfn.; not found at Kj. 583b26.; not found at Xz(I); not found at Xz(II); not found at Sh. 673a4.; not found at Tib. Pk. 299a5 = D. 274a7.

Lk. 473b9. 是時薩陀波倫菩薩及五百女人……遙見曇無竭菩薩在高座上坐、爲人幼少、顏貌姝好、光耀明照、爲數千巨億人中說般若波羅蜜。(p)

not found at AS. 250.27 = R. 508.6 = AAA. 956.24.; cf. AS. 249.23 = R. 505.18 = not found at AAA. 954.18.; ZQ. 505b11. 端正; not found at Zfn.; not found at Kj. 583c10.; not found at Xz(I); not found at Xz(II); not found at Sh. 673a29.; not found at Tib. Pk. 300a1 = D. 275a2. (他一例あり)

- (43) 原文は「持淨器盛好麻油」。「麻油」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 316: 麻油 (má yóu) “sesame oil” or “hemp-seed oil” Cf. 油麻 (yóu má)

HD. 12.1273b(三國志); Krsh(1998). 280, Wang Weihui 2007b: 257(齊民要術)

Lk. 460b20. (*Māra*) 或見自守 (←字)、或見乞食、……、或時在樹間止、或時有受請者、或時不受請、或時少多取足、或時麻油不塗身、…… (p)

AS. 192.7 = R. 387.9 = AAA. 774.4. (*apagata-pāda*)-*mrakṣaṇa*~ (“[one who does not use] oil [for rubbing the feet]”; not found at ZQ. 498c5.; Zfn. 533c5 = Lk; Kj. 570b23. (不受塗脚) 油; not found at Xz(I). 837b27.; not found at Xz(II). 909b4.; Sh. 652b4. (不受塗足) 油; Tib. Pk. 227b7 = D. 211b6. (*ṛkang pa*) *skud pa* (*dang bral ba*).

- (44) 原文は「不也。天中天」。「天中天」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010: 天中天 (tiān zhōng tiān) “the god of gods, the god surpassing all other gods, i.e. a buddha”

HD. 2.1408a(梁代); DK. 3.502d(法華經); Krsh(1998). 444, Nattier 2003 : 234.

Lk. 427a4. 舍利弗白佛言：“天中天！菩薩學如是、爲學般若波羅蜜？”(p)

AS. 7.30 = R. 14.16 = AAA. 64.11. *bhagavan*; ps-ZQ. 480a18. 佛; Zfn. 509c21. 天中天; Kj. 538b12. 世尊; not found at Xz(I). 765c2.; not found at Xz(II). 867b29.; Sh. 589a18. 世尊; Tib. Pk. 8b6f. = D. 8a7. *bcom ldan 'das*.

Lk. 427a16. 須菩提言：“天中天！若有問者：‘是幻爲學佛、得作佛？’或作是問、當何以教之？”(p)

AS. 8.23 = R. 16.2 = AAA. 69.20. .do.; ps-ZQ. 480b8. 世尊; Zfn. 510a6 = Lk; Kj. 538b23 = ZQ; not found at Xz(I). 766a2.; Xz(II). 867c24 = ZQ; Sh. 589b13 = ZQ; Tib. Pk. 9b3 = D. 9a4. *bcom ldan 'das*.

Lk. 428a4; (not found at AS. 12.11 = R. 23.21 = AAA. 105.3.; not found at ps-ZQ. 481a17.; not found at Zfn. 510c21.; not found at Kj. 539a22.; not found at Xz[I]. 767b10.; Xz[II]. 868c25.; not found at Sh. 590b28.; not found at Tib. Pk. 14a4 = D. 13b5.) (他八例あり)

- (45) 原文は「用麻油水精水鏡淨潔故」。「淨潔」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 276-277: 淨潔 (jìng jié)(1) “clean”

not found at HD. 5.1180.; DK. 7.26b(墨子)

Lk. 454c8. 阿惟越致 (an irreversible bodhisattva) …… 時徐舉足蹈地、安隱顧視。所裴 (←斐) 服衣被淨潔、無垢圻 (v.l. 圻)、無塩質。(p)

not found at AS. 162.24 = R. 326.12 = AAA. 671.11.; ZQ. 494c21. 清淨; Zfn. 527a5. 淨潔; not found at Kj. 564b1.; Xz(I). 826b9. 香潔; Xz(II). 901a14 = Xz(I); Sh. 641c2. 清淨香潔; not found at Tib. Pk. 194a3 = D. 180b1.

Lk. 455b21. 與婦人交接、念之：“惡露臭處、不淨潔、非我法也。盡我壽命、不復與相近。”當脫是惡露中去。(p)

not found at AS. 166.4 = R. 332.20 = AAA. 682.4.; ZQ. 495b19. 淨; not found at Zfn. 527c28.; not found at Kj. 565a17.; not found at Xz(I). 827c5.; not found at Xz(II). 902a11.; not found at Sh. 642c19.; not found at Tib. Pk. 198a1 = D. 184a3;

Lk. 459c30. 或我受決已 (←如?)、過去怛薩阿竭、阿羅訶、三耶三佛授我阿耨多羅三耶三菩阿惟三佛。是阿耨多羅三耶三菩所念悉淨潔故。(p)

AS. 190.3 = R. 384.1 = AAA. 768.4. *parisuddha*~ (“perfectly pure”); not found at ZQ. 498b20.; not found at Zfn. 533a17.; not found at Kj. 570a18.; Xz(I). 836c22. 清淨; Xz(II). 909a1. 清淨; Sh. 651c4. 清淨; Tib.Pk. 225b7 = D. 210a2. *yongs su dag*.

(46) 原文は「我所念即見」。藏訳対応箇所には *bdag ji lta ji ltar nam par rtog pa de lta de ltar snang ngo*// とある。

(47) すべての漢訳に 3M 対応箇所は存在しない。また藏訳に 3N 対応箇所は存在していない。

(48) 原文は「心是怛薩阿竭」。「怛薩阿竭」の語は『道行経』にも出る。

cf. Karashima 2010, 98: 怛薩阿竭 (dá sà ā jié); EH. *tat sat* ²a *gjiat* > QYS. *tât sât* ²â *gjot*[*gjât*³]) a transliteration of Gāndhāri **tasa-agada* (< Skt. **tathā-āgata*); cf. Gāndhāri *tasagada* (< Skt. *tathāgata*); cf. also Karashima 2006 : 356 = 2007: 294.

not found at HD. 7.475.

Lk. 429a27. 過去時、怛薩阿竭、阿羅訶、三耶三佛皆使諸弟子爲諸菩薩說般若波羅蜜。(p)

AS. 17.22 = R. 34.10 = AAA. 135.12. *tathāgata*~; ZQ. 482b-9. 如來; Zfn. 512a1 = Lk; Kj. 540a23. 佛; Xz(I). 769c27. 佛; Xz(II). 870b16. 佛; Sh. 592b7. 如來; Tib. Pk. 20b2 = D. 19b4. *de bzhin gshegs pa*.

Lk. 429c14; (AS. 19.12 = R. 37.14 = AAA. 151.13. *do*.; ZQ. 482c13. 如來; Zfn. 512b9 = Lk; Kj. 540b23. 如來; Xz(I). 770b21. 如來; Xz(II). 870c15. 如來; Sh. 592c25. 如來; Tib. Pk. 22b6 = D. 21b5. *do*..

Lk. 464c12. 佛語須菩提：“……於須菩提意云何？是怛薩阿竭本無隨因緣得怛薩阿竭。本無字寧有盡時不？”(p)

AS. 210.11 = R. 424.16 = AAA. 817.21. *do*.; ZQ. 500c11. 如來; not found at Zfn.; Kj. 574a8. 如來; Xz(I). 846b9. 如來; Xz(II). 913c3. 如來; Sh. 658b-6. 如來; Tib.Pk. 248a6 = D. 230a3. *do*.. (他二例あり)

(49) 原文は「設有念者亦了無所有」。「無所有」の語は『道行経』にも出る。

cf. Karashima 2010, 516: 無所有 (“does not exist”)

Lk. 475a22. 譬如佛現飛、<無所有>。般若波羅蜜現、無所有如是。(p)

not found at AS. 259.4f. = R. 525.4f. = AAA. 985.26f.; not found at ZQ. 506b15. (如佛現飛、本無所有、明度亦然); not found at Zfn.; Kj. 586a6f.; not found at Xz(I); not found at Xz(II); not found at Sh. 675c21f.; not found at Tib. Pk. 309a3f. = D. 283a7f..

Lk. 475a23. 前於愛欲中相娛樂、計之、無所有。般若波羅蜜計之、亦無所有如是。(p)

not found at AS. 259.4f. = R. 525.4f. = AAA. 985.26f.; ZQ. 506b16 = Lk; not found at Zfn.; not found at Kj. 586a6f.; not found at Xz(I); not found at Xz(II); not found at Sh. 675c21f.; not

found at Tib.Pk. 309a3f. = D. 283a7f.

Lk. 475a24. 人名及聲無所有。怛薩阿竭亦無所有。於前見者、念所作、因見。般若波羅蜜念所作、本無所有如是。(p)

not found at AS. 259.4f. = R. 525.4f. = AAA. 985.26f.; ZQ. 506b16 = Lk; not found at Zfn.; not found at Kj. 586a6f.; not found at Xz(I); not found at Xz(II); Sh. 675c21f.; not found at Tib.Pk. 309a3f. = D. 283a7f. (他一例あり)

〔略号〕

- AAA *Abhisamayālamkāra'ālokā Prajñāpāramitāvyaḥkyā The work of Haribhadra*, ed. Unrai Wogihara. Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store, 1973. [The first edition, Tokyo: Toyo Bunko, 1932-1935].
- ASP → AAA
- DBh 『梵文大方広仏華嚴經十地品』, ed. Ryūkō Kondō. Tokyo: The Daijyō Nukkyō Kenyō-Kai, 1936.
- KarP *Karuṇāpūṇḍarīka the white lotus of compassion: Edited with Introduction & Notes*, Vol. II, ed. Isshi Yamada. New Delhi: Heritage Publishers, 1989.
- Mvy *Mahāvīyūtpatti*. 榊亮三郎編 『梵藏漢和四訳対校 翻訳名義大集』国書刊行会, 1981. [初版真言宗京都大学, 1916].
- SP *Saddharmapūṇḍarīka*, (Bibliotheca Buddhica 10), ed. H. Kern & Bunyiu Nanjio. St.-Petersbourg: Imprimerie de l'Académie Impériale des Sciences, 1912.
- SRS I *Gilgit Manuscripts*, Vol. II (*Samādhirāja Sūtram*), Part 1, eds. Nalinaksha Dutt & Vidyavaridhi Shiv Nath Sharma. Shirinagar, 1941.
- PSS *The Tibetan Text of the Pratyutpanna-Buddha-Saṃmukhāvasthita-Samādhi-Sūtra*, (Studia Philologica Buddhica Monograph Series I), ed. Harrison, Paul. Tokyo: Reiyukai Library, 1978.
- T 『大正新脩大藏經』
- T. 416 闍那崛多訳 『大方等大集經賢護分』 (T 13, 872a1-897c15).
- T. 417 支婁迦讖訳 『仏説般舟三昧經』 (T 13, 897c26-902c19).
- T. 418 支婁迦讖訳 『般舟三昧經』 (T 13, 902c24-919c5).
- T. 419 失譯 『拔陂菩薩經』 (T 13, 920a4-924b17).

〔参考文献〕

Harrison, Paul

1978 "Buddhānusmṛti in the Pratyutpanna-buddha-saṃmukhāvasthita-samādhi-sūtra," *Journal of Indian Philosophy* 6: 36-57.

1990 *The Samādhi of Direct Encounter with the Buddhas of the Present: An Annotated English Translation of the Tibetan Version of the Pratyutpanna-Buddha-Saṃmukhāvasthita-Samādhi-Sūtra*, (Studia Philologica Buddhica Monograph Series V), Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies. [Ph.D. Thesis Australian National University, 1980]

Karashima, Seishi

2010 *A Glossary of Lokakṣema's Translation of The Aṣṭasahasrikā Prajñāpāramitā* 道行般若經詞典, (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica XI), Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology Soka University.

赤沼智善

1927a 「般舟三昧經の研究 (上)」 『宗教研究』 4(1): 97-117.

1927b 「般舟三昧經の研究 (下)」 『宗教研究』 4(2): 51-70.

大田利生

1983「般舟三昧と浄土教」『龍谷大学論集』423: 134-158.

梶山雄一・末木文美士

1992『観無量寿経 般舟三昧経』(浄土仏教の思想2) 講談社.

末木文美士

1989「『般舟三昧経』をめぐって」『インド哲学と仏教: 藤田宏達博士還暦記念論集』平楽寺書店, 313-332頁.

静谷正雄

1974『初期大乘仏教の成立過程』百華苑.

色井秀讓

1963「般舟三昧経の成立について」『印仏研』11(1): 203-206.

櫻部建

1991「書評・紹介 Paul Harrison: The Samādhi of Direct Encounter with the Buddhas of the Present, Tokyo, 1990.」『仏教学セミナー』53: 48-58.

玉城康四郎

1981「『般舟経』における念仏三昧の考察」『大乘仏教から密教へ: 勝又俊教博士古稀記念論集』春秋社, 85-103頁.

林純教

1994「般舟三昧経」西藏訳および漢訳諸本における比較研究(一): 「般舟三昧」“Pratyutpanna-buddha-Sammukha-avasthita-samādhī”の語義について」『仏教論叢』38: 93-98.

吹田隆徳

2016「般舟三昧と仏随念の関係について」『印仏研』65(1): 190-193.

2020「支婁迦讖訳『般舟三昧経』第二章」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』48: 17-29.

藤田宏達

1970『原始浄土思想の研究』岩波書店.

(ふきた たかのり 文学研究科仏教学専攻博士後期課程)

(指導教員: 松田 和信 教授)

2020年9月25日受理